



東北大学大学院国際文化研究科

同窓会会報

第 19 号



編集・発行 東北大学大学院国際文化研究科同窓会事務局 発行日：2021 年 3 月 25 日

〒980-8576 仙台市青葉区川内 4-1 TEL (022) 795-7556 FAX (022) 795-7583 E-MAIL <int-dosokai@grp.tohoku.ac.jp>

国際文化研究科の 2020 年

高橋 大厚

(国際文化研究科同窓会会長・言語科学研究講座教授)

この文章を書いているのは 2021 年 2 月なのですが、ちょうど一年前に同窓会報第 18 号に掲載していただいた文章を書いているときに、コロナウィルス感染症が世界的な拡大を見せ始めていました。その文章の末尾に「末筆になりましたが、この文章を書いている時点（2020 年 2 月下旬）で日本国内を含む世界の各地で新型コロナウイルスへの感染の拡大が報じられています。会員の皆様のご健康をお祈りし、世界がこの災禍からいち早く回復することを願ってやみません。」と記しました。その後は、会員の皆様もご存知のように、事態はまさしくパンデミックの様相となり、感染症は世界のあらゆる地域に拡大し、多くの人々の健康と生活に大きな影響を及ぼしてきました。

私たち国際文化研究科が位置する日本、そして仙台も例外ではありませんでした。2020 年 4 月に日本全国に緊急事態宣言が発せられ、その一月の間に仙台では数十名の感染者の報告がありました。その後は夏の間のいわゆる第二波、そして年末年始にかけてのいわゆる第三波を経て、この文章を執筆中の今（2021 年 2 月）は二回目の緊急事態宣言発令中です。一年前は、このような事態が一年も続くとは、可能性としては認識できても、実際のこととして予想できてはいなかったと思います。

同窓会会員の皆様は、お仕事、学業、私生活を含めて様々な影響を受けているのではないかと推察します。私たちも大学院という組織としてやはり少なからず、コロナ以前とは異なる考え方や行動を求められてきました。以下では、特に東北大学から離れられた会員の皆様に国際文化研究科がこの一年、どのような取り組みをしてきたかを紹介したいと思います。

国内のニュースでは、今年度全国のほとんどの大学のほとんどの授業がオンラインになったことが報じられました。国際文化研究科でも 2020 年度前期の授業の全てがオンラインで提供されました。4 月に急遽授業のオンライン化を決めた時は、果たして実行可能かととても心配しました。

授業を提供する教員側、受講する学生側、そして授業の円滑な実施を支援する事務側、いずれにおいてもそれまで経験したことがない中で、まさに手探りの毎日だったように思います。そのような中、学期終了時の授業評価では、「どの程度この授業に満足しましたか」という問いにおいて、私たちがグローバル展開基盤科目と呼ぶ、それぞれの分野の入門的な授業群では、「大いに満足した」が 48%、「満足した」が 32%、演習科目ではそれぞれ 65.2%、26.1%、個々の教員による講義科目ではそれぞれ 58%と 32%という評価を得ました。

後期においても事情はさほど変わらず、ごく一部で対面式の授業が行われましたが、大部分はオンラインで実施されました。私も後期に個人で教える授業を担当し、オンラインで実施しました。国外から参加する受講生もありましたが、通信もスムーズで、講義資料のオンライン配布、黒板代わりとなるホワイトボード型アプリの使用など、技術的にはオンライン授業でかなりの程度実施できることを実感しました。コロナ禍が終息した後でも、教員と受講生の居場所にとらわれず、充実した授業を提供できる可能性を垣間見ることができました。

国際文化研究科は全学生中の留学生の占める割合が高く、修士課程で約 80%、博士課程で約 50%となっています。私たちが授業運営の次に直面したのは、コロナ禍で国際的な人の移動が制限される中でどのように入学者を確保するかという課題でした。感染拡大第二波が発生していた 7 月には、9 月と 2 月に実施予定の入学試験を、従来の筆記試験＋対面式面接試験からオンラインによる口述試験＋面接試験に切り替えることを決定し、ウェブサイトを通じて周知しました。幸い、私たちは 2 つの国際コースにおいて従来から書類審査とオンライン面接による選抜を実施してきており、一定程度のノウハウがありましたので、この課題も何とか切り抜けることができました。9 月の秋季入試では、修士課程に 24 名、博士課程に 2 名、2 月の春季入試では、それぞれ 29 名と 15 名の志願者がありました。1 年前の 2019 年度に実施した入学試験では秋季が 16 名と 0 名、春季が 35 名と 10 名でしたので、志願者数という点では大きな影響なく入学者を選抜できたことになりました。

上述の授業や入試における対応に加え、国外に居住したまま修学することを可能にする制度変更を行ったり、大学の建物に入構する場合は事前に届出を出し、誰がどこに何時から何時まで滞在したかを追跡できるシステムを導入

したりなどの対策を講じてきました。教職員や学生諸君の協力のおかげで、何とかここまで大過なくいくつかのハードルを乗り越えてきました。国際文化研究科はこれからも、どのような試練があろうともコンスタントに同窓生を世に送り出せるように取り組んでまいります。同窓生の皆様も、ご健康に留意され、それぞれのお住いの地、それぞれのお立場で元気に過ごされますようお願いしております。

第19回同窓会総会のご案内

第19回同窓会総会を次のとおり開催します。ご参加くださいますようお願い申し上げます。

日時：2021年3月10日（水）17時30分～

場所：オンライン開催

国際文化研究科同窓会事務局

第18回同窓会総会の報告

第18回総会を2020年3月11日（水）に会議室にて開催しました。

国際文化研究科主催行事の報告

タイ・タマサート大学とのジョイントセミナー
江藤 裕之（言語科学研究講座教授）

タイ・タマサート大学教養学部との部局間学術交流協定の締結、及び、タマサート大学教養学部日本研究科の博士後期課程開設を記念して国際文化研究科の共催によるジョイントセミナー

「Open House for the Ph.D. Program in Japanese Studies, Thammasat University & Thammasat University-Tohoku University Joint Seminar 2020 International Cultural Studies and Japanese Studies: Present and Future Perspectives」が、2020年12月12日（土）にオンライン（ZOOM & Facebook Live）にて開催され、タイ人、日本人の大学教員、学部生・大学院生、あわせて60名程の参加がありました。

【プログラム】

- ・開催の挨拶 タマサート大学教養学部学部長
Asst. Prof. Dr. Passapong Sripicharn
- ・歓迎の挨拶 東北大学大学院国際文化研究科長
高橋大厚教授
- ・祝辞 国際交流基金バンコク日本文化センター
吉岡憲彦氏
- ・発表1「東北大学大学院国際文化研究科の紹介と国際文化研究について」
東北大学大学院国際文化研究科
江藤裕之教授
- ・発表2「今、なぜ日本研究なのか？」
タマサート大学教養学部学部
Prof. Dr. Warintorn Wuwongse
- ・発表3「タマサート大学日本学科博士後期課程プログラム」
タマサート大学大学院日本学専攻長
Assoc. Prof. Dr. Somkiat Chawengkijwanish

・質疑応答

OPEN HOUSE FOR THE PH.D. PROGRAM IN JAPANESE STUDIES,
THAMMASAT UNIVERSITY & THAMMASAT UNIVERSITY-TOHOKU UNIVERSITY JOINT SEMINAR 2020

INTERNATIONAL CULTURAL STUDIES AND JAPANESE STUDIES :
PRESENT AND FUTURE PERSPECTIVES

REGISTER

DATE : 12 DECEMBER 2020
TIME : 9:00-10:30 (THAILAND)
11:00-12:30 (JAPAN)
ONLINE : ZOOM

PROGRAM

- OPENING REMARKS
ASST. PROF. DR. PASSAPONG SRIPICHARN,
DEAN, FACULTY OF LIBERAL ARTS, THAMMASAT UNIVERSITY
- WELCOME REMARKS
PROF. DR. TAKAHASHI DAIKO, DEAN, GRADUATE SCHOOL OF
INTERNATIONAL CULTURAL STUDIES, TOHOKU UNIVERSITY
- CONGRATULATORY REMARKS
MR. YOSHIOKA NORIHIKO,
DIRECTOR GENERAL, THE JAPAN FOUNDATION, BANGKOK
- INTERNATIONAL CULTURAL STUDIES AT TOHOKU UNIVERSITY
PROF. DR. ITO HIRAYUKI
- WHY JAPANESE STUDIES?
PROF. WARINTORN WUWONGSE
- PH.D. PROGRAM IN JAPANESE STUDIES AT THAMMASAT UNIVERSITY
ASSOC. PROF. DR. SOMKIAT CHAWENKIJWANISH
HEAD, PH.D. PROGRAM IN JAPANESE STUDIES
THAMMASAT UNIVERSITY
- MO. DR. PASSAPONG SRIPICHARN

OPEN HOUSE FOR THE PH.D. PROGRAM IN JAPANESE STUDIES,
THAMMASAT UNIVERSITY & THAMMASAT UNIVERSITY-TOHOKU UNIVERSITY
JOINT SEMINAR 2020

INTERNATIONAL CULTURAL STUDIES AND JAPANESE STUDIES : PRESENT AND FUTURE PERSPECTIVES

Q & A

近年、タイを代表する3つの大学（カセサート大学、チュラロンコン大学、タマサート大学）で日本学専攻の博士課程が開設されました。本研究科は東南アジアの大学との交流を推進しておりますが、タイはその中心的な存在です。なかでも、タマサート大学とはここ10年ほど、共同シンポジウム、教員や学生の人的交流を深めており、今回の博士課程開設を機に、大学間交流協定とは別にタマサート大学教養学部と部局間交流協定を締結しました。これまでの協力関係をさらに深めるべく、そのkick-offの意味を込めて今回のジョイントセミナーを共同企画・開催しました。



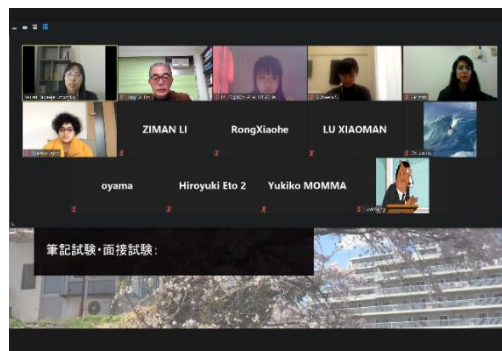
本研究科からは研究科長と教員・学生若干名が参加し、江藤裕之教授（言語学）による東北大学、及び国際文化研究科の紹介、また東北大学における国際文化研究についての報告がなされました。タイには本研究科の修了生も多く、今後の本研究科の東南アジア地域における国際交流の拠点として交流を推進してまいります。

国際キャリア講習会

「留学・就職・研究・教育について先輩と語ろう」

江藤 裕之（言語科学研究講座教授）

国際文化研究科では、毎年、研究職、ビジネス職、専門技術職など、さまざまな分野で活躍する修了生を招いて、就職についての経験談、アドバイスを研究科の後輩、そして広く東北大学の在学生の皆さんにお話いただく「キャリア講習会」を開催しております。今年は、コロナ禍のため対面式の講演会は見送ることとし、オンライン形式での開催としました。そこで、その利点を活かして海外で活躍する修了生を講師にお招きし、2021年1月10日（日）に「国際キャリア講習会—留学・就職・研究・教育について先輩と語ろう」を開催しました。



講師は、タイから本研究科に留学し、博士学位を取得後、出身国での教育研究職についたロイケオ・スィリアチャーさん（2019年3月国際文化研究科言語科学研究講座博士後期課程修了、現ラームカムヘン大学日本語科講師）、ザリンラット・カウィーチャールモンコンさん（2019年3月国際文化研究科言語科学研究講座博士後期課程修了、現チュラロンコン大学日本語科講師）で、国際文化研究科での研究と就職活動、日本での異文化体験、そして、なぜ今の職業を選んだか、大学院で学んだことは役に立っているか、などについて話をしていただきながら、参加者と語り合う交流の場をもつことができました。研究科内外の学生（学部生も含む）と教員、事務職員など、20名ほどの参加がありました。

90分ほどの時間ではありましたが、和やかな雰囲気で行われ、「大学生活や就活・就職後の体験など、特に海外での大学教員のポストについての話が参考になり、自分の進路について再び考えるよい機会となった」や「演習会を通して、大学院在学中や帰国する前にすべきことなど、大事で有益な情報を手に入れることができて、今（研究生の時）から将来計画を立てて事前準備ができるので大変貴重な機会でした」といったアンケート回答もあり、今後も対面式だけではなく、オンラインを使った講習会も実施してまいりたいと思います。（江藤裕之教授）

第12回「不可視の隣人」

映画の背景解説＋討議の実施について

藤田恭子（多文化共生論講座教授）

1月23日、第12回「不可視の隣人たち」がオンラインで開催された。取り上げた作品は『13th（サーティーンズ）憲法修正第13条』（2016年、アメリカ）、講師は落合明子氏（同志社大学グローバル地域文化学部教授）である。

世界のマイノリティを取り上げた映画を上映し、専門家の解説を聞いて参加者全員で討議するという催し「不可視の隣人たち」は、第12回を迎えた。しかし本年は、コロナウィルスの感染対策のため、従来のように一堂に会して映画を鑑賞することはできず、Zoomによるオンライン開催となった。そのため、従来からこの催しに何度も足を運んでくださった方々のすべてが参加できる環境にはない、というつらい状況になった。リピーターの方々には開催通知とともに、オンラインでの参加ができない場合、希望す

れば、解説や質疑応答の記録をプリントアウトして郵送する旨もお伝えした。当日は33名が参加し、記録冊子の郵送希望者は20名となった。合わせて53名である。



映画『13th 憲法修正第13条』は講師の落合氏が推薦した作品で、制作・配給元のネットフリックスは、コロナ禍にある教育の支援のため無料で提供している。事前に同作品を鑑賞していただき、当日、講師による解説と質疑応答にオンラインでご参加いただく、という形をとった。

運営にあたる教員5名もオンラインで会議せざるを得ない。そのなかで、第12回では、「Black Lives Matter(黒人の命も大事)」(以下、BLM)をテーマとすることで一致した。2020年5月にアフリカ系アメリカ人のジョージ・フロイド氏が警察官に首を圧迫されて死亡した事件とその後の展開が当然のことながら念頭にあったが、トランプ政権下のアメリカで、社会の分断が顕著になっているとの認識も、決定の後押しをした。

講師の落合明子氏はアフリカ系アメリカ人の歴史や文化について南北戦争後の再建期を中心に研究されており、またその歴史がアメリカ社会において、いかなる形で記憶されてきているかを検証している。いわば、BLMを語る最適者のお一人である。以前は本研究科の旧アメリカ研究講座に所属されており、「不可視の隣人たち」シリーズ創設メンバーでもある。前述のように、『13th 憲法修正第13条』は落合氏の推薦映画であり、プロジェクトチームも視聴後、BLMを理解するために最適の映画であると判断した。



アメリカ憲法修正第13条では、「奴隷的拘束の禁止、但し、犯罪への処罰を除く」と定めている。奴隷制度廃止により「奴隷的拘束」は禁止されたが、例外となる「犯罪への処罰」としての「奴隷的拘束」の内実が問題となる。映画では、世界の総人口に占めるアメリカの人口が約5%であるのに対し、世界の全受刑者に占めるアメリカの受刑者が約25%であること、またアメリカの総人口に占める黒人男性が約6.5%であるのに対し、アメリカの全受刑者に占める黒人男性は40.2%という衝撃的な数字が明かされている。アメリカでは収監率自体が極めて高く、特に黒人男性の収監率が不自然に突出しているのである。

解説では、南北戦争による黒人の「解放」から現代の大量投獄に至る道のりを概観し、その複雑な諸要因と背景となるその時々時代の状況を確認する一方、多数派である白人から黒人が「他者化」され、「危険視」「犯罪者化」により厳罰が正当化されていく言説の歴史を辿った。加えて、平均1万ドルという保釈金や弁護士費用が貧困層の収

監を加速させている刑事司法制度の問題点も紹介された。大量投獄問題に取り組む団体が、アメリカには、主に白人の富裕層向けと主に非白人貧困層向けの「2つの歴然とした刑事司法制度」が存在すると指摘しているとの紹介もあった。落合氏は、映画ではあまり触れられていないこととして、「機能不全」の公選弁護制度や受刑者・元受刑者の投票権の制限・はく奪などの問題も指摘している。

解説の最後に落合氏が問いかけたのは、BLMを他山の石として、「周囲に暮らす多様な人々が自分にとって『不可視の隣人』ではなく、『危険視』され『犯罪者化』された『不可視の隣人』となっていないか」ということである。コロナ禍のなか、外国人の犯罪もニュースで報じられるが、情報を冷静に判断する心構えが問われている。

質疑応答は、チャットで質問を提出する方法と、Zoomの挙手機能を用いての意志表示後に口頭で質問する方法が併用された。回答を通じて、BLMの運動としての幅広さや多様性が示され、修正第13条制定の経緯について歴史学で今後検討すべき諸問題も話題となった。落合氏が指摘した「危険視」「犯罪者化」の対象が、9.11後のイスラーム教徒やトランプ政権下での不法移民にも広がっていること、メディアにおける表象のステレオタイプ化にも話が及び、BLMを通して、日本社会における日常を省みる機会ともなった。

来年は、また通常の対面方式で第13回「不可視の隣人たち」が開催できることを、心より願っている。

新型コロナウイルス感染症拡大の研究科学生への影響調査

江藤 裕之(言語科学研究講座教授)

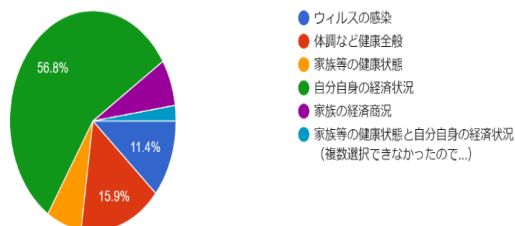
新型コロナウイルス(COVID-19)感染症はいまだ終息の兆しをみせず、東北大学の行動指針(BCP: Behavior and Conduct Policy)はここ数か月レベル1となっていました。本稿を執筆している段階ではレベル2となり、集会や移動が大幅に制限され、ますます予断を許さない状況となっています。

この前例のない状況のなか、国際文化研究科では、学生支援の観点から研究科が取り組むべき具体的な対応策を検討する基礎資料を収集するために、新型コロナウイルス感染症に対し研究科所属の学生がどのような問題や不安を感じているか、研究科にどのような期待を寄せているかを調査しました。

調査期間は本年5月22日～6月2日と11月19日～11月30日の2回、本研究科の各講座の学生、及び英語コース(言語総合科学コース[IGPLS]、グローバルガバナンスと持続可能な開発プログラム[G2SD])所属の学生を対象に行われました。回答数は1回目が講座学生105名中66名、英語コース学生26名中18名、2回目が回答数は講座学生99名中45名、英語コース学生29名中24名でした。主な質問事項は「生活面での不安」「授業・研究活動面での不安」で、以下、第1回目と2回目の調査結果を比較しつつ報告いたします。

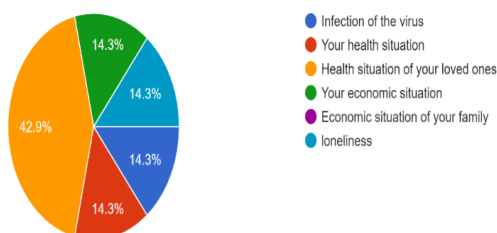
生活面での不安（講座学生）第 1 回

「はい」と答えた方にお尋ねします。どのような点に問題・不安を感じていますか？（複数回答可）
44 件の回答



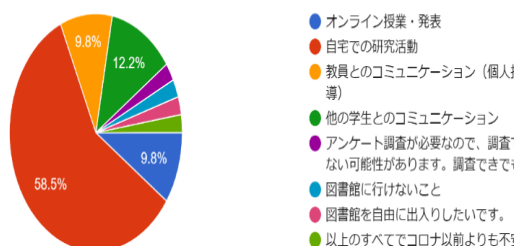
生活面での不安（英語コース学生）第 1 回

If yes, what are they? (Multiple answers allowed.)
7 件の回答



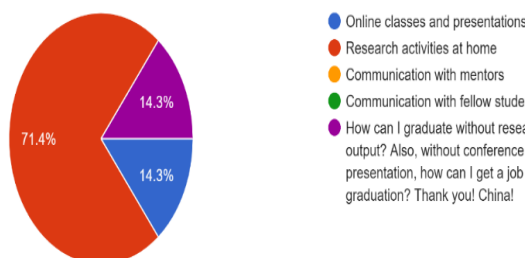
授業・研究活動面での不安（講座学生）第 1 回

「はい」と答えた方にお尋ねします。どのような点に問題・不安を感じていますか？（複数回答可）
41 件の回答



授業・研究活動面での不安（英語コース学生）第 1 回

If yes, what are they? (Multiple answers allowed.)
7 件の回答

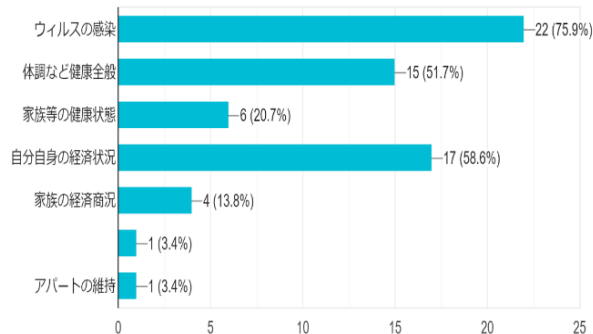


第 1 回目の調査で特に目立った点としては、急激なアルバイト収入減による経済的不安、オンラインによる授業や演習等のネット環境への不安、図書館及び院生室の一時的閉鎖にともなう研究活動への不安があげられ、こういった

不安に対する研究科の積極的な支援が期待されていることがわかりました。とりわけ、奨学金を受給していない学生（留学生も含む）の経済的不安は大きく、研究科としては東北大学、及び外部の緊急の奨学金についての情報収集と学生への周知、またリサーチアシスタント枠を有効に利用した経済支援などの対策を講じました。

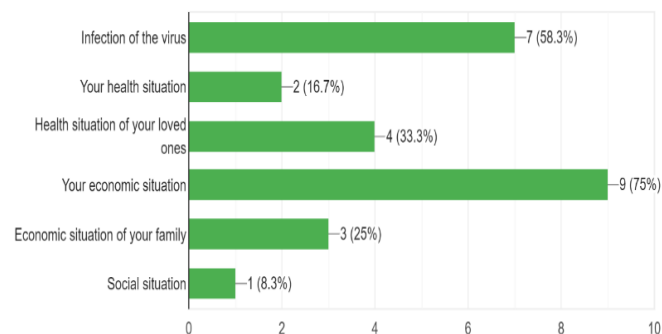
生活面での不安（講座学生）第 2 回

「はい」と答えた方にお尋ねします。どのような点に問題・不安を感じていますか？（複数回答可）
29 件の回答



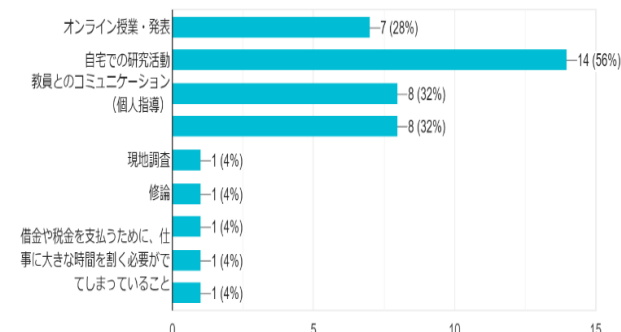
生活面での不安（英語コース学生）第 2 回

If yes, what are they? (Multiple answers allowed.)
12 件の回答



授業・研究活動面での不安（講座学生）第 2 回

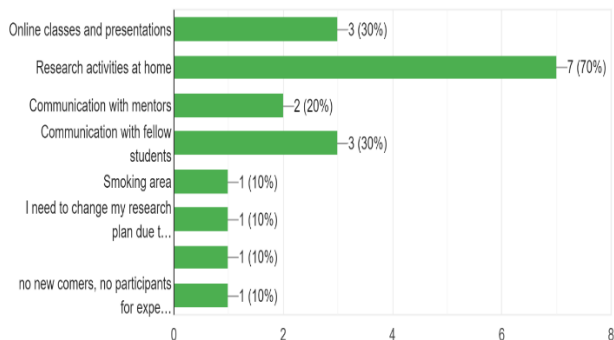
「はい」と答えた方にお尋ねします。どのような点に問題・不安を感じていますか？（複数回答可）
25 件の回答



授業・研究活動面での不安（英語コース学生）第2回

If yes, what are they? (Multiple answers allowed.)

10 件の回答



2 度目の調査結果を見ますと、概ね、1 回目の調査内容と同じですが、それはこの感染症がまだ根本的な解決を見ていなかったからだと思います。違いは、第2 回目の方が、日本語コースで「生活面の不安要因として『自分自身の経済状況』よりも『ウィルスの感染』が上回った」こと、英語コースで毎日の生活での不安が25 ポイントほど増え、経済状況やウィルス感染がその主要因となったことです。

以上が2 回の調査の簡単な比較結果です。ここには記載していませんが、自由記述なども総合して見た結果、特に下記の点が必要と考えています。

- ①講座内での情報提供（共有）、コミュニケーション
- ②学生間での交流、情報共有
- ③経済的支援

研究科としての情報提供は重要であり、研究科ウェブサイトのホームページに「新型コロナウイルス感染防止関連のお知らせ」というバナーを張り付け、そこから必要な情報にアクセスできるようにしていますが、より詳しい学生用ガイドラインについて、学生にメール配信するとともに、研究科ウェブサイトへの掲載もしました。このガイドラインは随時情報を改訂しています。

経済的支援に関しては、今後も継続して奨学金の情報提供などを強化するほかに、RA の採用枠拡充など予算措置を実行しました。また、情報不足、研究科スタッフと学生間のコミュニケーション不足からくる精神的不安をできるだけ解消するために、メールでのやりとりを密にしたり、Google meet 等を用いてのリアルタイムでの演習、個別指導を推進しています。

この状態がいつどのように収束していくのか、いまだ先が読めない状況ではありますが、研究科では、今後でもできる限りの対策を行い、感染拡大を防ぐとともに、この厳しい状況下で教育・研究活動が支障なく行われる環境づくりを継続して行っています。

「アルムニひろば」同窓生のコラム

Wu Lili

(She graduated from the International Graduate Program in Language Sciences in September, 2020.)

I was admitted to the doctoral program of the International Graduate Program in Language Sciences at GSICS in October, 2017, and I received my degree in September, 2020. After graduation, I came back to China and have been working as an English teacher.



A photo taken at the school trip to Kawatabi in October, 2019. Ms. Wu at the center of the front row.

When I first arrived in Sendai, the only thing that worried me was the language barrier. Though I brushed up my Japanese, I was afraid that my broken Japanese could not make myself understood. To my great surprise, the staff in the International House could speak English well, and they were willing to help international students like me. Besides, GSICS also assigned me a tutor who was proficient in Japanese. My lab mates, with different language backgrounds, always not only inspired me in research but also lent me a hand whenever I was in trouble. With their help, my life in Sendai became much easier than I had expected. However, there was always something unexpected happening. When I was about to graduate, students were told that working in the lab was discouraged. I totally understood the measures taken by the school to contain the spread of COVID-19. Though the days were tough, I had got plenty of help from the professors and staff at GSICS.

Presently, I am teaching first-year students in Huaiyin Normal University located in Huai'an, Jiangsu Province, China. To cope with the current COVID-19 situation, students here are required to return to the university with their health QR code on schedule, and then they will have a two-week quarantine period on campus. Online classes have already started since March 1 and I will have in-person classes with my students from March 22. Thanks to my experience at GSICS, I always have something interesting to share with my students when we talk about languages.

March 12, 2021

事務局より

①「アルムニひろば」について

14号から新たに同窓生のコラム「アルムニひろば」を設けました。「アルムニ alumni」は同窓生を意味するラテン語です。このページでは、修了後の同窓生の活動を紹介してゆきます。投稿も歓迎いたします。

②同窓会メールマガジンについて

事務局では会員の皆さまに興味をもっていただける情報を随時お届けしたいと思います。また、会員の皆さまからもメールマガジンに掲載してほしい情報などをお寄せください。

③メールアドレスについて

メールアドレスを変更された方や未登録の方は次のアドレスにご連絡をお願いします。メールアドレスは厳密に管理し、同窓会・研究科からの連絡をお送りする目的にのみ使用します。

国際文化研究科同窓会

int-dosokai@grp.tohoku.ac.jp

④同窓会ホームページ

これまでの総会、理事会、会報、その他の資料を掲載していますのでご覧ください。

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/alumni/>

⑤同窓会懇親会について

事務局では今後とも会員の要望に基づき懇親会を開催したいと考えていますので開催希望などお寄せください。

⑥ご意見・ご提案等を！

同窓会についてのご意見・ご提案等がございましたら事務局までお知らせください。宛先は本会報の題字欄に示してあります。また、ご住所・勤務先・メールアドレス等に変更がございましたらご連絡願います。お寄せいただいた個人情報は厳密に管理し、同窓会・研究科からの連絡をお送りする目的にのみ使用します。

⑦会費・寄付金の納入のお願い

会則第11条第1項及び12条に基づき会員の皆様に会費等の納入をお願いいたします。

○入学、進学及び編入学者で未納の方

(1) 国際文化研究科前期課程の学生：4,000円

(2) 国際文化研究科後期課程の学生：

編入学者：5,000円 進学者：3,000円

(令和3年3月現在)

○上記以外の方(修了生、在学生、現教職員・元教職員等)にはご寄付という形のご支援をお願いできますと幸いです。

○会費・寄付金とも、郵便局からお振り込みいただくか、国際文化研究科教務係窓口へ直接お納めください。

郵便振替口座名称：国際文化研究科同窓会

郵便振替口座番号：02220-5-6